

「危機に問われる信仰」

Ⅱ 列王記 18:17-25

【1】序

ヒゼキヤは王として主の御前に生きた一人の信仰者であった。彼は、イスラエルの王としてイスラエルの民を代表して信仰が問われた。彼が生涯に渡って問われたのは神への信頼であった。この信頼は抽象的なことではない。ただ、聖書を信じていますという口先のことでもない。信仰はその生き方に現れる。預言者によって語られたみことばにより頼み、生きるのである。信仰をもって生きるとは、何よりもまず主を知ることである。主を知らなければいくら自分はクリスチャンだと名乗っていたとしても、何を信じているのか曖昧になり、実践が伴うことはない。主に従うことができない。主を知ることによって自分の心を定め、そこに堅く立ち、自らを従わせることができるのである。

【2】主の支配の中で

ヒゼキヤの生涯には三つの大きな出来事があった。第一は主の宮の奉仕の回復。第二はアッシリアの来襲。第三は病気とそれがもたらしたことである。今日は第二の出来事、アッシリアの来襲による信仰の危機を通らされる場面である。このアッシリアの来襲は歴史の中の偶然ではない。人類の歴史は、主の御手の中にある。私たちは、主の支配という視野をもって歴史を学ばなければならない。神は時としてご自身の民の罪に気づかせ、神に立ち返らせるためにアッシリアをも神の腕として用いられるのである。かつての歴史もそうであった。神は歴史を通して働かれ、ご自身が神であることを示される

のである。列王記はヒゼキヤに賛辞を送りながらも、すべてが主のみわざであることを明確にしている。彼もまた試みられなければならず、訓練されなければならなかったのである。主のみわざはいつも人の弱さの中に現されるのである。

【3】何に拠り頼んでいるのか

ヒゼキヤはアッシリアからの危機を逃れるために貢物を送った。しかし、アッシリアの要求を受け入れることが救いの道でないことはすぐに明らかになった。この出来事は呼び水のようにアッシリアの強い態度を招いた。セナケリブから遣わされた高官ラブ・シャケは、ヒゼキヤに向かって降伏を要求し、「何に拠り頼んでいるのか」とヒゼキヤの信仰を試みた。信仰者はしばしばこのような試みを受けるのである。確かにラブ・シャケの言い分にも正しいことがある。神は、主を知らぬ者をおしても訓練を与えることがある。

【4】危機に問われる信仰

信仰の試練はしばしばこのような形でやってくることもある。しかし、ラブ・シャケが真に主なる神を知っているわけではなかった。クリスチャンであっても大きな苦しみ、試練に遭う時、神やキリストの真実を疑ってしまうことがある。このようなときこそ、私たちが知っている、真実なる神の恵みに心を向けなければならない。

確かにヒゼキヤは完全な信仰者ではなかった。しかし、神の恵みは尽きることがないのである。今、信仰の危機の中にある者は幸いである。その人は神の恵みのみわざを見るからである。試練の中にあるなら、そのときこそ聖書に記された主の御業を見よう！